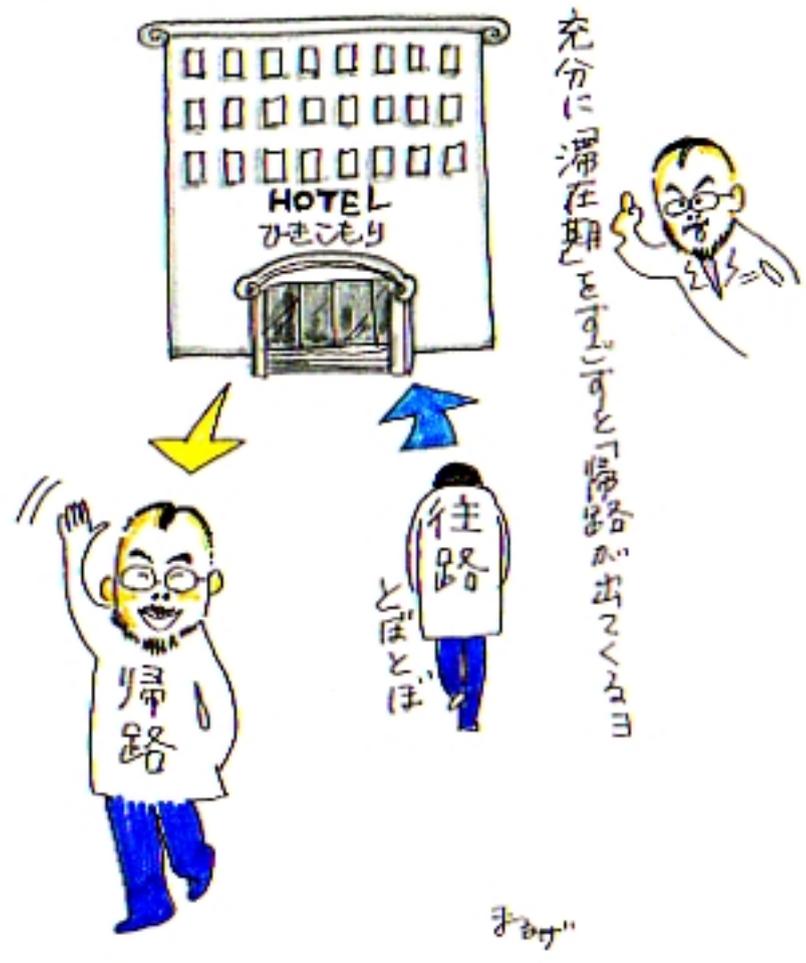


お気楽
精神科医の
頑張りなさい

人生のスヌメ 第二十八話

「ひきこもり」 日本に特有の現象

福島淳 イラスト・福島マルゲリータ



そもそも、「ひきこもり」とは何か？
まず、これは病名ではなく状態を示す言葉である。その定義は次のように言われている。

長期にわたり自宅自室へ引きこもり、社会参加しない状態が続いている。
他の精神障害がその原因とは考えられない。

精神科の専門用語で、無為・白閉」というのがあるが、これは統合失調症(旧病名・精神分裂病)のある状態像を表す言葉で、今回のテーマの「ひきこもり」とは違うものである。

ひきこもった状態の人は、ほとんど外出せず、場合によっては数年以上にわたって閉じこもった生活を続けており、しばしば昼夜逆転した不規則な生活を送っている。その結果として、様々な精神症状が2次的に生じてくる。

この「ひきこもり」概念が形成される流れを、高岡健氏は2つに分けて説明している。

1.「対人恐怖症」の側面から。

明らかな関係念慮(周囲の出来事や他人のなんでもない、言動を自分に関係している)と疑うこと(や、関係妄想(関係念慮が確信に至ったもの)を認めないもの、漠とした対人緊張や自己不確実感を訴え、長期にわたってひきこもる人々。そんな、回避・ひきこもりを特徴とする対人恐怖症と呼ばれるもの。赤面恐怖、視線恐怖、体臭恐怖、加害恐怖などの対人恐怖症をもとに考えられた概念と言える。

2.「不登校」の側面から。

まず、分離不安(例えば子供が母親から離れる時に感じる不安)や、強迫神経症(白分でも非合理だと判っているのに止められない思考、行動に悩まされる病気)といった精神医学的解釈論。そこから、病気ではなく、現象であるとして、精神疾患として捉えない反精神医学的解釈へ。さらに、戸塚ヨトスクールに代表される偽精神医学的解釈(脳幹が脆弱だから情緒障害が出現する)へと流れる。やがて、操作的診断基準を用いた不登校の細分化、その次が不登校を疲労と捉えて学校を休む権利の確立へと移っていく。

また、「ひきこもり」には、他者関係からの撤退だけではなく、自己からの撤退という段階がある。自己からのひきこもりという段階へ至った場合だけが、正しい「ひきこもり」だとも言われている。

自己からの撤退とは、自分らしさを守るために、またはこれ以上大切な自己が傷つかないように、社会的自己から逃れることである。

この社会的自己とは、社会的価値観や社会的規範に染まっている自己という意味だそう。平たく言えば、社会のしがらみに染まった自分から、逃れようとすることである。

この考え方に沿って、ひきこもりには「往路」と「滞在期」と「帰路」があり、十分に「滞在期」を過ぎること、帰路が出てくると考えられる。そこで、止しく「十分に「ひきこもり」の重要性が指摘されている。

ひきこもりの発生年齢層で一番多く、その3分の1を占めているといわれるのは高校生世代である。

また、全年齢層で男性が8割を占める。その多くが不登校で始まり、それが大人に移行して蓄積しているのが現状のようだ。学校でのいじめ、友人とのトラブル、受験の失敗などを契機に、ひきこもっていく。

そして、ひきこもった本人の矛先は、親へと向う。この世に完璧な親などいないにもかかわらず、親は親で、特に母親は、自分の子育てが悪かったと子供の言いなりになって、ひきこもった本人の奴隷となり、「母子共依存」が始まる。

父親と母親の考え方の違いが明確になり、犬婦伸の悪化というオマケが付いたりもする。家庭が機能不全に陥ることになる。

斎藤環氏によれば、「ひきこもり」青年は、「他者のいない牢獄」に閉じこもっているという。

そこにあるのは、真空のような自由、無重力のような自由なのだ。それはしばしば致命的なまでの自由であって、多くの人はそれに耐えることができない。

自由であるためには、他者との一定の制約が必要で、出会いと関係性に関わっていない自由は、まさに致命的な自由にはかならない、と述べている。

また、「ひきこもり」は日本に特有の現象らしい。「Sumou(すまう)」や「Sushi(すし)」「と並んで、「Hikikomori(ひきこもり)」は海外でも

通用する単語になってきている。

アメリカやヨーロッパでは、基本的に「自己主張」しない意志のない人は人間とみなされない。子供の頃から、人は何のために生きるのか、「どのよう生き方をすべきか」を学ばせる文化的背景の力が大きいと思われる。

ところで、「ひきこもり」は「悪いこと」なのであるか？

ひきこもりは誰にでも生じる可能性があり、ひきこもることで精神的破綻を防いでいるというのが、一般的な考え方のようだ。

不登校を例に、もう一度考えてみる。不登校はいろいろな契機があるにしろけつきよくは学校に馴染めない場合に発生する。つまり、自己が学校によって傷つけられないように守るわけだ。

この守りの姿勢を周りが理解してやらないと、本人は自らを追い詰めていかざるを得なくなる。場合によっては、一時的な精神病症状(幻覚や妄想)が出たりもする。

その上、「ひきこもり」が「悪いこと」だと思わせる状態が続くと、最終的には「白傷」や「他害」に至るしかない。

なぜなら、抑止力として機能していた「ひきこもり」が破綻すると、自己価値の低下や破壊に繋がりが、具体的な自己の破壊(自傷、自殺)や相対的な他者の破壊(他害)をもたらすからだ。

誰でも、小さな「ひきこもり」を経験しながら、大人という「不自然体」へと、ある意味で成長していくのだ。

